

タイトル 『佳子のさくら』 作・佐藤喜久子

登場人物 女性2名

楠木万里子 八十八歳
下倉安子 六十四歳

暗い舞台がだんだん明るくなる。

舞台中央に春を待つ冬の木が一本浮かびあがる。

安子が万里子を車椅子に乗せて登場。

安子 レッチエンタールに春がやってくる。春を告げるために春を告げる行進がある。行進する男たちはナポレオン時代の兵士の姿。一方、婦人や子供たちの民族衣装は大変美しい。この季節にはよその町ではたらいっている村人も、必ずこの兵士になるために帰省する。「もし、この帰省を拒否したらどうなるのですか」と村長に聞いた人がいたそうです。どうなると思います。

万里子 帰るんですねみんな。

安子 「もしも仮装を拒否したらどうなるんですか」と村長に聞いた人もいたそうです。どうなると思います。

万里子 罰があるんですか。

安子 聞いた人によるとそういう人はいないし、もし都合で参加できなければ村民全員にファンダン、これは地酒だそうですが一本ずつおごることになるそうです。村人全員だったら大変な数になりますよね。だから、お祭りには絶対参加しなくてはならないのです。

万里子 地酒はどんなお酒なの。

安子 スイスのワインだと思います。それほど美味しくないんじゃないですか。聞いたことありませんもの。スイスのワインなんて。

万里子 梅酒ならうちにもありますよ。毎年作りましたもの。

安子 (嬉しそうに) 梅酒ですか。

万里子 アンさん、梅酒が好き。

安子 お酒なら何でも。梅酒も好きです。時々、飲みすぎて失敗しちゃうことがあるんですけど。(笑っ)

万里子 台所にたくさんありますよ。長いこと置いてあるので、熟して美味しくなっているのもあるはずですよ。夫が亡くなつてから飲む人がいなくてね。全部飲んでしまつてちょうだい。残しておいても困るだけだから。

安子 いただくのが楽しみです。なんだか元気が出てきました。

万里子 それは良かった。アンさんが飲める方で梅酒もラッキー。今、私たちどのあたりまできたのかしら。

安子 おんなじような家があつて、おんなじような塀があつて。

万里子 もうすぐ、右手に坂がありますよ。その坂をのぼってくださいな。

安子 ああ、右手に坂があります。細長い道が続いています。だから、だから。ずうつと上の方まで。

万里子 角に板塀の家があるでしょう。

安子 はい。でももう板がぼろぼろになつて、ところどころ穴が。あら、こんな大きな穴がある。

安子、腰をかがめて穴をのぞく。

安子 (おごそかな口調で) 河の神の顔をかたどつた大きな石の円盤。うそをつく人間がこの口に手をいれると抜けなくなる。

安子、手を穴に入れる。

安子 穴の中には何がある？

万里子 アンさん、あなた、手を穴にお入れになつたの？

安子 ああ、抜けない。どうしましょう。

万里子 からかつても駄目。真実の口でしょう。映画で見ましたよ。ローマの休日。

安子 すみません。穴があると向こうに何かあるような気がして覗いたり、手を入れたくなるんです。(笑っ)

万里子 何かありません？

安子 なんにも、なんにもありません。いつも何にもないんです。

万里子 いつか見わかりますよ。ウサギを追いかけて穴に飛び込んだ不思議の国のアリスのように。

安子 そうでしょうか。

万里子 そうですよ。

安子 坂をのぼります。(右手を上げる)

万里子 のぼってくださいな。(右手を上げる)

安子 随分と急な坂ですね。

万里子 アンさん、この坂道、ご無理だったかしら。

安子 いいえ。大丈夫です。

万里子 急な坂でしょう。

安子 へっちゃらです。

万里子 荷物なんてここにおいておいてくださっていいのよ。誰もってなんていかないんだから。

安子 そんなわけにはいきませんわ。こんな荷物の一つや二つ。

万里子 あと少しですから。ゆっくり、のぼっていただけなにかしら。

安子 このくらいでいいですか。

万里子 このところ目の具合もよくなってぼんやりしか見えないのに、なんでもはっきり見える時があるの。

安子 今日は如何ですか？

万里子、目をつぶる。

万里子 見えますよ。順番に。汽車の窓の景色がどんどん変わっていくように。一軒、一軒。屋根の色、生垣の塀、垣根からのぞいているお花。

安子 見ようとすると見えるんでしょうか。

万里子 ゆっくり、このあたりを見ておきたい、思い出しておきたいの。ゆっくり、ゆっくり。

安子 ご病気なさる前はいつもここをのぼってたんですか。

万里子 走りましたよ。

安子 えっ、この急な坂を？

万里子 若い頃はなんだかいつも忙しくて、走ってばかりいました。この何年かは膝の調子がね。だから騙し騙し歩いてのぼりました。ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり。ゆっくり。椿の生垣の家があるでしょう。

安子 椿ですか？

万里子 赤い花ですよ。深い緑色の葉っぱをしょっている赤い花。

安子 赤い花と緑の葉っぱ。ああ、ここの家だ。

万里子 アンさん、椿の花は元気？

安子 ええ、元気でいっぱい咲いています。

万里子 良かった、今年もたくさん咲いて。手入れがいいのよ。手入れしないと咲かないんですか？

万里子 椿はね、虫がつきやすいの。

安子 黄色い花が咲いています。

万里子 どんな花かしら？

安子 細長い木に黄色い花。

万里子 蠟梅ですよ。

安子 蠟梅、蠟梅っていうんですか？

万里子 いい香りがするの。

安子 蠟梅の木の横に赤いかわいい花が咲いています。

万里子 寒紅梅でしょ。いつもあの梅が咲くと春がもうすぐだと思つたよ。

安子 梅ですか。あの梅の実で梅酒ができるんですか？

万里子 もっと遅く咲く白梅の木から実がなるのよ。

安子 梅でも実がなるのとならないのがあるんですね。

万里子 ここのお宅で咲く梅の実を毎年いただいていたのよ。古い古いお友達。一緒に梅もいで梅干作ったり、梅を煮たり、梅酒をつけたの。子供達遊ばせながら。

安子、車椅子を止める。

安子 お声をかけましょうか。

万里子 雨戸が開いていて？

安子 しまつてます。

万里子 札幌にいる息子さんが風を通しに時々来るのよ。

安子 物音一つしません。

万里子 笑い声が聞こえたわ。誰がいるのかしら？

安子 (高い声で) すみません。どなたかいらつしゃいますか？

万里子 いいの。ずっとお留守なの。このまま行つてくださいな。

万里子、涙をハンカチでおさえる。

安子 大丈夫ですか。

万里子 ごめんなさいね。なんだか、涙もろくなって。さあ、出発してください。

安子 標高一三八〇メートル。ガンベルシュテークからバスで来るコースは楽しい。駅を出て線路を渡るともう急な山道にはいる。一気にヘアピ

ンカーアープの坂をいくつもこなして谷を攀じのぼっていく。プーポーパーといふ音が谷に木霊する。プーポーパー、プーポーパー。

万里子 プーポーパーって何？

安子 バスが坂をのぼる時、スイスではプーポーパー、プーポーパーっていうんです。

万里子 プーポーパー、プーポーパー。

安子 プーポーパー、プーポーパー。

万里子 アンさん、さつきからあなた、何をしゃべってらしたの？

安子 スイスの旅行案内書で私が覚えていた箇所をかってにそらんじているだけです。

万里子 そうだったわね。私達はスイスにいるのね。

安子 そうです。スイスの山をのぼっています。もうすぐ春の花が咲き出します。ほら、あちらの山の雪が溶けてきています。道にタンポポが。あちらにはお花畑が薄い

桃色にそまってぼんやり浮かんでいます。

万里子 アンさんのお話はロマンチック。本当にスイスにいるような気持ちになって、体

も心も雲に浮かんでいるようです。ふわりふわり。ふわりふわり。ごめんなさい。

安子 私、時々変なこと言つてしまう。

安子 いいえ、変なことをしゃべっているのは私です。言葉がかってに口から出てくる

んです。

万里子 私、長く病院にいたせいか時々混乱することがあるの。本当は今、何月かしら？
安子 一月です。

万里子 まだ一月。アンさんが「もうすぐ、春になる」とおっしゃったから、もうすぐ三月かと思いました。

安子 まだまだ冷たい風が吹いています。

万里子 そうね。風が縮こまっていておかしいなと思いましたよ。長く病院にいと今何月で何日で何時なんてわからなくなるのね。病院にはいつも季節外れの花がいけてあるし。いつも温かくて私が温室で栽培されているような気持ちがあるわ。

安子 病院には一年中バラとカーネーションが溢れていて温室のようですね。

万里子 切り刻まれたバラとカーネーション。

安子 フラワーアレンジメントと言うそうです。

万里子 見てると息苦しくなるの。若い方はお好きなようだけど。アンさんは好き？

安子 切り刻まれたり、針金でぐるぐるまきにされたり、お水だってスポンジの水ですよ。お水くらいたっぶり飲ませてあげたっていいじゃありませんか。花が可哀想ですよ。(額の汗を拭く)

万里子 可哀想ですよ。

安子 雪が降ってきました。

安子、車椅子を止めて、天を見上げて、両手で雪を受ける。

万里子 風花。

万里子も天を見上げて、両手で雪を受ける。

安子 花ではありません。雪ですよ。

万里子 晴れている空からくると風が舞いながら雪を運んでくることがあるでしょう。

風花というのよ。

安子 雪が花。花が雪。雪が風にのって花になる。

続く